

趣旨説明

考古学・文化財資料 3D 計測の意義を考える

－なぜ？どのように？－

野口 淳

(考古形態測定学研究会)

近年、考古学・文化財分野では 3D 計測が急速に普及しています。一方で、導入や実践に困難を覚える状況も少なくないようです。その背景にはさまざまな要因・条件があると思われるが、推進したい側の意図・目的が十分に伝わっていない・受容されていないことも大きいのではないかと考えます。

たとえばマーケティングの世界では、次のようなことが言われます。

“ホームセンターでドリルを買う人は、ドリルが欲しいのではなく、自分の家で壁に穴を開けたいのだ。ほしいものはドリルではなく穴だ”

『マーケティング発想法』T.レビット

3D 計測を推進したい私たちは「ドリルの素晴らしさ」だけを見て、説明していませんか？ 3D 計測の導入、成果の利用に関わる人たちが「何をほしいのか」を理解していますか？ そこにコミュニケーションは成立していますか？

積極的に推進したい、その意図・目的をしっかりと伝えて、理解を得るためには、まず、受け入れられるかたち・内容で意義や価値を説明することが必要だと考えます。

そこで今回に先立ち、2020 年 8 月 1 日に非公開・参加者限定で「3D 計測エンパワメント・ワークショップ 3D 計測、誰のため？何のため？」を企画・開催しました。ここでは 3D 計測に既に携わっている・導入を進めている多様な立場からの参加者が、グループワークを通じて、それぞれの意見を交換し、共通の課題と解決方法を見出すことを目指しました。その概要とアウトプットは基調報告として 6 ページ以降に掲載しています。ここでは、議論とアウトプットを俯瞰した上での、企画・主催者としての問題意識を示したいと思います。

3D 計測を推進する上での見えやすい、分かりやすい課題は、技術的な問題です。たとえば、機材や方法、データの公開、運用・維持コストなど。しかし意見交換を進めていくと、そうした技術的な問題が解決できたとしても、なお導入・普及を阻む壁になりかねない要素が背景に横たわっていることに気づきました。端的に言うとそれは、考古学資料・文化財の 3D データに対して、「文化財としての意義・価値」と「コンテンツとしての意義・価値」のどちらを見出すのかという立場、または認識の違いです。

これ自体は実は、3D データに限らず、広く「文化財の利活用」を論じる時に繰り返しあらわれる「対立軸」であるかと思われます。たとえば「文化財の活用」と産業としての観光の振興は両立し得るのかどうか、など。

ところが議論を掘り下げていくと、ここに「3D データ」が関わると、さらにややこしい状況が生じるようだということが見えてきました。考古学資料・文化財の記録・ドキュメンテーションという意味では同じものともいえる、2D の図面（いわゆる「実測図」）や写真以上に、3D データだからこその課題があるのではないかという意見が、根強く存在しているようです。それは、3D データの包括性と再現性ゆえによるもののようです。つまり図面や写真はある方向からの一面的な様相しか写し取り、示し得ないため、複写・複製されても、部分的なものにとどまるのに対し、3D データは丸ごと全体に及び、かつ近年の技術の発展により高精細・高解像度の複写・複製が可能になっているということが問題視されるようです。

ではなぜ、そのような複写・複製が問題視されるのでしょうか？ 問題がある／起こり得るという立場からは「文化財としての意義・価値」を毀損するような利用のされ方が生じるのではないかという懸念が聞こえてきます。包括的・全体的でかつ高精細・高解像度であるがゆえに、データであっても、その扱われ方が「文化財としての意義・価値」に直結するという考え方と言えるでしょう。

一方で、文化財は「貴重な国民的財産」であり「できるだけこれを公開する等その文化的活用に努めなければならない」とする文化財保護法第四条 2 の条文にもとづいて、積極的な公開を進める中に 3D データを含めるべきだという主張もあります。この場合、対象となる 3D データを文化財そのもの（の分身）と見るかコンテンツという対立と言うよりは、文化財の扱い、公開利用に対する姿勢の違いと言えるかもしれません。

いずれにしても、3D データの性質ゆえに生じた議論であり、意見の相違ということになりそうです。

それでは、このような状況に対して、私たちはどのような解決策を見出すことができるのでしょうか？ 先行して実施したワークショップのアウトプットを足掛かりとして、さらに多くの参加者を募り、それぞれの立場から意見・アイデアを出し合うことによって、今後、議論を進めるための道標を整備することを目指したいと思います。